



滝浦 哲[写真]
Photo:Tetsu Takiura

PEOPLE

作詩家

松本隆

まつもと・たかし●1949年東京都生まれ、20歳のとき、和歌山県民と「はっぴいえんど」を結成、日本語によるロックの可能性を切り開く。同解散後、作詩家となり、松田聖子らのヒット曲を手掛けて、ポップスの世界に一時代を画した。著書に小説「微熱少年」など。

偉大な作曲家たちとの真剣勝負、新譜『天国への階段』が導く先。

学

生時分、ロックの好きだった人なら一瞬、えっと思う題名じゃないだろうか。しかし、あの有名な曲とこの新譜とはまったくの無関係。

「……ええ、レッド・ツェッペリンは2枚目までしか聴いていないし。制作中に、人に言われて、初めてそういう曲があることを知ったくらいです。一時はタイトルを変えようかなとも思った。でも、どうしても、これ以外にはありえなかった」

そのくらいの確信が、このタイトルにはこめられていた。

「僕はずっとCDやビデオで聞きすることを中心にした、複製芸術の世界で生きてきた。でも、10年くらい前からその限界を感じて危機感を抱くようになったんです。で、小説や映画の分野に手を広げる一方で、十件来る仕事の依頼を「に抑え、余暇を利用して勉強を始めた」

古典音楽との出会いもそうした勉強のひとつだった。

「そうするうちに、過去の作曲家たちが作ったいいメロディと戦ってみたくなり、いま彼らの住む天上の世界と自分とを橋わたしする『階段』が必要になってきたんですよ」

複製メディアを介して繰り返して聴ける現代の音楽は、一期一会の緊張感を失って墮落している。だが、楽聖たちの時代はそうではなかった筈である。

「劇場にいないと体験できない感動を体験したい。そう思っ



大竹しのぶ/松本隆プロデュース
『天国への階段』
(BMGビクター/2500円税込・1月21日発売)
有名なクラシック曲のメロディに日本語の歌詩をのせ、女優・大竹が唄った作品集。全体が、ひとりの女性の誕生から死、再生までを描く構成になっている。収録作品の原曲は、モーツァルト/クラリネット協奏曲、ドビュッシー「月の光」、ベートーヴェン「悲愴」など。ラストのカクローニア民謡「鳥の歌」の作詞は、今回一番苦労したという。

た松本さんが、あえて「瞬間」の芸術に挑戦する。そのためのステップという意味でも、このアルバムは『階段』である、という。一見、浮世離れた幻想的な作品に仕上がっているが、その底に、現代の文化状況への批評意識も思っている。

「大竹しのぶさんは音域の広さと天性のリズム感を持っている。近年はマスコミが作りあげたスキャンダラスなイメージが彼女に押しつけられていますが、彼女自身はそれとまったく無縁に生きています。そういう本当の無邪気さも、今度の僕の狙いに合っていました」

一人の人物の中に、いくつもの感情が同時に生きている、それが自分の詩の特徴、と分析した。慎重に言葉を選びながら自作を語る松本さんの表情は、まさにその言葉通りに見えた。